



働くということ

大分県・大分東明高等学校 2年 向江 梨見

「将来の夢」というと大抵の人は将来自分が就きたい職業を考えるだろう。だが「将来の夢」は持っても、なぜ自分がその職業を選ぶのか、何のために働くのかが明確に掴めていない人というのは案外多いのではないかと思う。また、自分のなりたい職業に必ずしも全員が就けるというわけではない世の中で理想とは違った仕事をする事になった場合、働くということの捉え方は夢見た職業に対する捉え方とはまた違ったものになるだろう。私はまだ「将来の夢」が決まっていないがこれを機会に働くということについて考えてみようと思う。

私は働く人に大きく分けて2つの種類があると思う。「自分の仕事が好きで働く人」と「仕方なしに嫌でも働く人」だ。小さい頃からの夢を叶えて仕事に就いた人や努力を積み重ねてプロになったスポーツマンはきっと前者だろう。逆に夢見た仕事には就くことができずサラリーマンになった人、実家の家業を継ぐことを余儀なくされた人、生きていくためだけに働くフリーターは後者に当てはまるのではないだろうか。しかし、私は夢見た仕事に就ける人などほんの一握りしかいないのではないかと思う。学生の時に考える「将来の夢」は「医者」や「刑事」「教師」などの専門職で「商社マンになる」とかいう夢を持つ人は多くないはずだ。私自身も今までに考えたことがあるのは「薬剤師」や「航空管制官」など資格をとる職業であった。だがこう考えると、夢と違う職業に就いた人が皆嫌々働いているとは思えない。もしそうであったならばこの社会はこれほど充実してはいないだろう。そこで私は両親に話を聞いてみることにした。

私の父は企業に勤めるサラリーマンだ。1年前から大分県を離れ三重県に単身赴任している。家族と離れてさみしがっている父が働き続ける理由は家族を養うためにお金が必要だからということだけであると思っていたがそうではなかったようだ。知る出来事があった。単身赴任して1ヶ月程経った頃父が私に「こっちは最先端の技術を生み出しているから楽しいよ」と自慢気に





話していた。私は父でもそんなことを思うんだ、と意外に感じた。

母は塾で先生をしている。キャビンアテンダントになるのが夢だったが今はこの仕事に就いているのだ。お金のためと、私と兄に勉強をさせるために先生を始めたが私と兄が辞めた今でも続けていてもう10年以上になる。母がよく生徒が検定試験に受かったと言って嬉し^{うれ}そうにしているのを私は見る。

父も母も夢見た職業に就くことができなかつた人だが嫌々ながら仕事をしているようには思えない。むしろやりがいを感じて働いているようである。この両親の姿から私は気づいたことがある。たとえ望んだのとは違う仕事をしていても、その仕事と向き合い、懸命に働いていれば、やりがいを見つけることもできるし、そこでの新たな目標も生まれるものだというのだ。だから大事なものは夢見た職業に就くということだけではないと思う。自分に与えられた仕事に全力で取り組む、そしてそれに応じた給与をもらう。それが働くということなのではないだろうか。これが今回見つけた私の考える「働くということ」である。

私が今使っている物や食事は全て両親が働いて得たお金で買ってもらっている。私は先程「仕事をして給与をもらうことが働くということ」と述べたが、給与をもらわない「働く」もあるということに気づいた。それはボランティアである。私は野球部のマネージャーをしていて部活動ではあるが選手のために仕事をするのも一種のボランティアではないかと思う。民間の非営利組織であるNPOや非政府組織のNGOはボランティアの象徴的存在であり、高い専門性を持って環境保全や災害援助など様々な活動にあたっている。このようなボランティアで活動を続ける人々は仕事に対して情熱だけでなく大きな誇りを持っていると思う。私がマネージャーの仕事をするときも少なからず誇りを持ちそれを忘れないようにしている。どんな仕事であっても自分の仕事に誇りを持つことは働く上で重要なことなのではないだろうか。

初めにも述べたように私はまだ将来就きたい職業が決まっていないが、興味があることは沢山あるため、この先色んな夢と出会うだろう。たとえ私とその夢を叶えられず望まない仕事をするようになったり、ただお金を稼ぐためだけに仕事を始めたりしたとしても、私はその仕事と向き合って新しい目標を見つけていこうと思う。そしていつか自分の仕事を誇りに思えるようになりたい。

私は今回働くということについて両親の姿から大切なことに気づけたが身近





に働く人は山ほどいる。コンビニ店員やバスの運転手、道路工事のおじさんも、自分の周りの働く人の姿からこれからもまた新たな「働くこと」の意味を探していきたい。

